

教会の奉仕について（総論）

2008 年度第一回教会勉強会

日本キリスト改革派松戸小金原教会 牧師 関口 康

1、「教会の奉仕」とは何のことか

「教会の奉仕」というテーマについて改めて学ぶことは、意義深いことです。しかし、なんとなく捉えどころのないことのようにも思われてなりません。「奉仕」という言葉からわたしたちが受けとる印象の一つは「報酬や見返りを要求しないで働くこと」ではないでしょうか。そういうことであれば、教会ならば、キリスト者ならば当然であると、だれでもわりとすんなりと理解できることでしょう。

ところが、です。次にわたしたちが「教会の奉仕」という言葉を「“教会の中で” 報酬や見返りを要求しないで働くこと」と言い換えてみるとします。そうしますと、そこで多くの人を感じ始めることは、「私は“教会の中では” 特に何もすることがありません。ここで奉仕することができるのは、一部の人々ではないでしょうか。若い人、健康な人、生活や時間に余裕がある人、積極的に活発な人。そういう人々ならば何かをなすことが可能かもしれないませんが、今の私はそうではありません」ということではないでしょうか。私が最も心配していることは、「教会の奉仕」という話が始まるや否や、教会の中に“寂しい思い”を抱く人々が現われるのではないだろうかということです。

この問いかけに対しては一つの典型的な答え方があることを、わたしたちはよく知っています。「いや、決してそんなことはありません。教会の中には、いろんな奉仕の場があります。牧師になることも、長老や執事になることも、また日曜学校の教師や各会の役員になることも、すべては奉仕です。しかし、教会には、炊事や掃除や洗濯や、そういうことを含めて、あらゆる奉仕の場があります。もちろん、礼拝に出席すること、説教を聴くことそれ自体、賛美すること、献金をすることも十分な意味で奉仕です。教会の中にはなすべきこと、奉仕の場は山ほどあります。私には何もすることがありません、ということはありません。教会活動のすべては一人一人の奉仕によって成り立っているのです。」

私はこのような答えが間違っていると考えているわけでは、まさかありません。非常に正しい答えです。そしておそらく、今日お集まりの皆さんも、私がこのような方向の話をするのだろうと期待しておられると思っています。

しかし、私自身の場合に限って言わせていただきますと、「教会の奉仕」という言葉を目にしたときに真っ先に考えることは、今申し上げたような答えの内容とは大きく異なっています。今の答えの方向で理解された「教会の奉仕」の主語は“わたしたち一人一人”で

しょう。つまり、「わたしたち一人一人が、教会の中で何らの奉仕活動を行う」という話で
しょう。私の場合はそういうことを真っ先に考えることはありません。むしろ私が真っ先
に考えることは、「教会の奉仕」の主語は“教会”であるということです。それはもちろん
「教会が、神とこの世に対して奉仕する」という意味です。

ただし今の説明は必ずしも正確なものではありません。なぜなら、わたしたちの信仰に
よれば、「教会」とは神御自身がお立てになったものだからです。神がお立てになった教会
が「神に対して奉仕する」と言うならば、「神が、神御自身に対して奉仕する」ということ
になり、おかしな話になってしまいます。ですから、より正確には「神御自身がお立てに
なった教会が、この世に対して奉仕する」と語るべきなのです。

ここで少しまとめておきます。「教会の奉仕」という言葉で、私が真っ先に考えることは
「教会の、この世に対する奉仕」という意味です。そしてこの点を了解していただいた上
で、「教会の中でわたしたち一人一人の奉仕」という点はいわば二番目に考えられるべき
事柄であると申し上げたいのです。これが今日の発題における大前提です。

2、教会の目的は「教会の外」にある

勤の良い方々には、上に私が申し上げたことは昨年度と同じく第一回教会勉強会で申し
上げたこととよく似ているという点におそらくすぐにお気づきいただけることでしょう。

昨年は「主の日と週日」というテーマでお話いたしました。わたしたちキリスト者にと
って「主の日」はきわめて重要な意義を持っています。しかしだからといって「週日」
は大した重要な意味を持たない単なる通過点に過ぎないのかという点と決してそうではない
とお話ししました。むしろ「主の日」は一週間のうちの一日に過ぎない。あとの六日間は
徹底的に「この世に仕えること」こそがキリスト者の使命であるという点を、かなり強調
して申し上げました。

今日の発題は、昨年度の発題の言い換え、または応用編であるとお考えいただいて結構
です。ということは、昨年のお話に納得できなかったという方々には今日の話にも納得して
いただけないかもしれません。そのことを覚悟しています。しかし、勇気をもってお話し
したいと願っています。

おそらくわたしたちの実感において「教会」は、主として「主の日の現実」であるはず
です。もちろん主の日以外にも教会は存在していますし活動しています。しかしたとえば
松戸小金原教会のこの教会堂は、主の日（と水曜日）以外のほとんどは、がらんどろです。
このことを悪い意味で言っているのではありません。しかし、なかには「あらら、なんと
もったいない」と感じる人々がいてもおかしくないでしょう。とはいえ、ここでただちに
「週日にもこの教会堂を活用してはどうか」というような提案をしたいと思っているわけ
ではありません。お話ししたいことは、別の次元のことです。

それならば、今日私は、ここで何を言いたいのでしょうか。「教会の奉仕」という言葉で第一に考えるべきことは、昨年の発題との関連で言うならば、「主の日の現実」にかかわる事柄よりもむしろ「週日の現実」にかかわる事柄のほうではないだろうかということに他なりません。

このように語ることに私は何か抽象的なことを申し上げたいわけではありません。「週日の現実」という点でわたしたち（多くが日本人であるわたしたち）が、否が応でも意識させられ、自覚させられていることは、圧倒的にキリスト者人口の少ないこの社会の中で生きている（我々教会のメンバーを含む）人々の“生活現実”であるということです。別の言い方をすれば、わたしたち自身の「週日の現実」は、ほとんどすべてが「教会の外」にあるということでもあります。“キリスト教的な”雰囲気や言葉、あるいは“教会らしさ”のようなものを探そうと思っても見つからない社会の中に、わたしたちは、ほとんどの日を過ごしているのです。

ですから、私が「教会の奉仕」という言葉で考えることは「教会の外なる社会への奉仕」ということでもあります。そしてこの点（教会の外なる社会への奉仕という点）こそが、そもそも教会の存在理由ないし“目的”でもあるということ、私は申し上げたいのです。

3、「教会の外」は悪魔の巣窟ではない

そしてその上で私は、この話の流れの中で起こりうる最も大きな誤解の種を取り去っておかねばなりません。それは、少なくとも私は、「教会の外」なる社会は悪魔の巣窟であるというようなことを述べるつもりは全くないということです。そのような考え方は改革派教会の教義が完全に拒否しています。改革派教会の教義の内容は、究極的に言えば、人が救われるのは「神の恵みの選び」によるのであって、つまり、神の一方的で主権的な恩恵によるのであって、洗礼を受けているかどうか（すなわち、教会員であるかどうか）さえも最終的な救いの保証にはならないというものです。

この教義を、わたしたちは「予定論」あるいは「神の恵みの選びについての教理」などと呼んでいます。これは洗礼を受け、教会員になることの意味を軽くする教えではありません。しかし、この教義を受け入れている者たちは、洗礼を受けることを救いの絶対的な保証や条件に“加えない”ことにおいて「救われる」人がいるということを知っています。たとえば、洗礼を受けぬまま死去した幼児や神の御言葉に接せぬまま死去した人々は必ず滅びるなどとわたしたちが語ることはありません。また、もう少し細かく分析していけばいくらかでも具体的な例があるでしょう。

わたしたちは、洗礼を受けていない人々（教会の内に加えられていない人々）の中にも「救われる」人々がいることを信じています。そして、また逆に（外的な意味での）「洗礼を受けた」という事実があっても、その人々の中に、信仰を放棄し、教会生活を中断し、

あるいは教会の中でこそ異端的な教説を唱え、教会を混乱や破壊に導いてきた人々もいるということ、わたしたち改革派教会は「予定論」の告白と共に語ってきたのです。

ですから、わたしたちは、「教会の外なる社会への奉仕」を行う際に、まるで悪魔の巣窟にでも飛び込むかのような武者ぶるいをすべきではありません。尻込みすることも怯えることも根本的に間違っています。社会には“ごく普通の人”がいます。普通の人と普通に付き合えばよいだけです。

4、「キリスト者の社会奉仕の主体ないし母体としての教会の確立」という課題

しかしまた、どうかあまり不安に思わないでいただきたいと願っていることを、同時に申し添えておかねばなりません。もしかして不安に思っておられるかもしれないことは、私が考えている方向に進んでいくと教会の存在は社会の中に吸収されてしまうのではないかということでしょう。社会への奉仕は社会の人々に任せておくべきである。社会の人々は教会を助けてくれるわけではない。教会はキリスト者の奉仕によって支えられている。だからこそ我々は、声を大にして、教会それ自体の存在の重要性を叫ぶべきではないか。そのような意見が起こりうることを私は知っています。

そして私はそのような意見には大賛成なのです。教会は、教会の外なる社会の中に吸収されてしまっはなりませんし、また世間の一組織と同じようなものになってしまっはなりません。教会は神御自身がお立てになった救いの共同体です。教会の中で人が現実的に救われるのです。教会に代わるものは社会の中にはありません。聖書や神学の研究ならば一般の大学やカルチャーセンターなどでも行うことができます。冠婚葬祭ならば教会の外にも（ある意味でもっとそれにふさわしく整えられた）会場が提供されています。しかし、「洗礼を授けること」（キリスト者を生むこと！）と「説教と聖餐を行うこと」（キリスト者を育てること！）は、教会以外のいかなる組織や団体にも不可能です。教会の存在理由ないし目的のすべてが「教会の外」にだけあるわけではありません。

そして「教会」がキリスト者を生み、育てることを目的としているとすれば、キリスト者の社会奉仕の主体、ないし母体もまた「教会」であると言わなければならないはずですが。キリスト教主義の学校や社会福祉施設やその他諸団体でさえも、教会の代わりにはなりません。そういうところで聖書を学び、説教を聴き、場合によっては聖餐式にも与っているからという理由で「教会は不要である」と思われることがあるとしたら、本末転倒という他はありません。

しかし、それにもかかわらず、です。私自身は、教会それ自体の存在理由が「教会の内」にもあるという点を声を大にして申し上げたい一人ではあるのですが、しかしまた、「教会の外」を全く見ていないような教会（“自己目的的教会”とでも言うておきます）は非常に困った存在であるという点も強調して語らなければならないと思っています。

たとえば、教会の最たる使命は「伝道」と言われます。この「伝道」が、教会の外の人々へと神の御言葉を宣べ伝えることを意味していないとしたら、それは一体何なのでしょうかという問いが残るでしょう。「教会の奉仕」という問題もこの点では同じです。「わたしたちは日曜日に“教会の中で”何ができるか」という点だけに終わってしまっただけではありません。「わたしたちは週日に“教会のために”何ができるか」という点を加えても、なお不十分です。真に問うべきは「わたしたちはすべての日に“教会に連なるキリスト者として、社会に向かって”何ができるのか」ということです（ただしこれは「教会や中会や大会がボランティアグループを結成すべきである」という話ではありません）。

5、具体的な奉仕の基準としての「律法」

ここに至って、私の話が結局のところ抽象化していると感じる向きがあるかもしれないと自覚しています。「教会の奉仕」とは、あれをすること、これをするということ、という具体的で実際的な指示が語られることを期待しておられた方々の思いを裏切っているかもしれません。実を言いますと私はこれまで、そのような指示を語ったことはないし、これからもあまり語るつもりがありません。「やっぱりか」と思われる方もおられるでしょう。

しかし、お断りしておきたいことは、私の申し上げていることは抽象的な話ではないということです。ただ、ことさらに、キリスト者はこうあるべきだ、こういう場面ではこうするべきだ、ということを私が“指示”しないのは、こと「奉仕」に関しては、それぞれのケースで結論が全く異なると考えているからです。わたしたちの奉仕には、メニューやカタログがあるわけではありません。世のため人のために役立つこと、人の助けになることを見つけ、とにかく何でもする。見返りを求めずにする。このことが重要なのです。

それでも、キリスト者の・教会を通しての・社会奉仕という意味での「教会の奉仕」には何らかの基準が必要であるという点だけは語っておくべきでしょう。私はそれを律法、とくにモーセの十戒に求めたいと願っています。

わたしたちが取り組むべき「社会奉仕」の基準は律法、とくにモーセの十戒です。それを正しく理解するためにカルヴァン『キリスト教綱要』や『ハイデルベルク信仰問答』や『ウェストミンスター信仰規準』（その中の大・小教理問答）の解説が役に立つでしょう。

「いや、そうではない。キリスト教会の奉仕の基準は、イエス・キリスト御自身の生であり、十字架の死に至るまでの従順である」という考えがあることも知っています。それを否定するつもりはありません。

わたしたちは、たしかにイエス・キリストを模範として生きている者たちです。しかし、だからといってわたしたちは、イエス・キリストのように「罪人の身代わりに死ぬ道」を選ばねばならないわけではありません。

(2008年3月16日、日本キリスト改革派松戸小金原教会)